

# Fieldworker

【考古学】

## 「世界が注目する縄文文化と噴火湾」

國學院大學教授 小林 達雄 氏



こばやし・たつお  
國學院大學教授。  
1937年11月生まれ。  
新潟県長岡市出身。  
國學院大學大学院博士課程修了。著書：「日本原始美術大系I 縄文土器」、「縄文文化の研究」他。

第三回目の「**Fieldworker**」は、縄文文化研究の第一人者で、世界的な考古学者である小林達雄先生です。小林先生は、伊達市北黄金貝塚や洞爺湖町入江・高砂貝塚、今金町美利河遺跡の史跡整備委員長として、噴火湾沿岸の遺跡の保存と活用に尽力されてきています。

世界に縄文文化を紹介し続けている先生に、世界的視野で見た噴火湾の遺跡について、そして考古学を志したきっかけなどについて伺いました。

### ◆史跡整備委員長である洞爺湖町入江・高砂貝塚の整備の取り組みは？

遺跡には、時代や地域といった背景をもとにした個性がある。その個性を表現できるのが一番いい。つまり、その時代の息吹が感じられるような、あるいは、たたずまいが感じられるような整備がよい。

伊達市の北黄金貝塚は原点に帰って、遺跡の個性を表に出したために全国でも注目されてきている。

入江・高砂貝塚も、ここでしかないものを出す必要がある。まずは見た目が大事。高砂川の水辺の樹木や、水の上のところに水棲生物がいて、生の営みがある。これを、手をかけながら復活させて、人間の生活舞台としての環境を復元していければいいのではないかと。

### ◆美利河遺跡や鷲ノ木遺跡など噴火湾沿岸の遺跡にも関わっていらっしゃいますね

縄文時代において貝塚は表看板の一つです。貝塚が集中する地帯は、九州・瀬戸内海沿岸・東海地方・関東・仙台湾・三陸・噴火湾くらいしかないのです。とても大事。貝塚は、ここで繰り返された人間の歴史を典型的に表している。また、縄文人が生活を展開した中で、ストーンサークルは並みのものではなく、それなりの個性を表現したものです。景色としてまとまっている。こういうものは世界遺産に持っていくような内容を持っている。

### ◆世界遺産ですか！？

いま、世界的に縄文は注目されている。これまで

効率主義で、進歩と思っていた生き方が、歴史上かつて無いような負担を地球にかけてきた。さらに、それを止めるという方法を身につけずに、声だけ「危機的な状況だ」と叫んでいるだけ。縄文文化のように、かくも自然と共生した文化・時代に対するノスタルジアみたいなものが、世界的に意識されている。例えば、ヨーロッパならケルト文化、新大陸ならアメリカ先住民の文化なのです。

トーテムポールを作ったアメリカ先住民の文化も農耕を持たないで、自然と共生して生きてきた。彼らについては人類学者が相当な記録を残しており、レベルの高い内容がはっきり示されている。一方、縄文文化は土中に残されたものしかなく、はっきりと内容はつかめていない。しかし、150年の研究の積み重ねにより、土器づくりは世界に先んじて行なわれたことがわかっている。

文化的な高い、低いは一概には言えないが、少なくとも文化的要素はどっちが豊かかといえば縄文なんです。ケルト文化やアメリカ先住民の文化よりも豊かな内容を持っている縄文文化に、今、熱い視線が注がれているのです。

縄文の舞台としての噴火湾は、実は世界、人類の歴史の中で注目すべき舞台ということになる。縄文の典型、あるいは代表は、世界の文化の代表の一つなんです。

このような、しっかりした文化の認識を持っていれば、世界遺産に対する動きにしても、国際的にすぐに応じられる。縄文に対する視線は、海外の方が熱い。日本人は、空気みたいに思っている。縄文土器や貝塚は知っているが、その価値を人類史全体の中で位置づけることについては無頓着です。

噴火湾の貝塚文化は、本州北部のストーンサークルと絡めながら世界遺産に持っていくくらいの力は持っている。それを、みんなで認識する必要があるんじゃないだろうか。自分の顔は自分で見ることができないのと同じですね。

### ◆先生が考古学を志したきっかけは？

小さい時は「科学少年」でした。学校から帰ると勉強しないで、トンボだとか魚だとかを相手にしていた。ただ、相手しているだけではなく、意識して自然を見るようにな

った。「科学少年」というのは、学問的世界があるのだということに目覚めた時、それに関心を寄せるのが科学少年なんです。

僕は、まず昆虫少年だった。図鑑を人から借りて、ポロポロになるまで調べるんです。それが小学校5年です。

次は植物少年になった。6年生の一年間だった。いい先生がいて、教えてもらった。標本づくりもした。

5年生頃の教科書に浜田青陵（耕作）の書いた縄文時代についての国語の教科書があって、はじめて、縄文土器や石器があることを知った。実物を見たいと思ったが、当時は博物館もない。しかし、心には残っていた。

「考古学」という学問がそれに関わるということはその時は知らなかった。ところが、同じクラスのライバルの一人が「考古学」という名前を知ってたんですよ。びっくりした。僕はガキ大将の一人だったので、いろいろなことを知っていたし、先頭たって暴れていた方なのに、自分の知らないことを知っていたということで、ちょっとショックを受けた覚えがある。

この時に教科書で読んだ「貝塚」だとか「縄文時代」に対する思いがずーっと残って、心の中に沈殿していたのです。

中学生になって、新入生を囲んでの座談会があって、将来何になりたいかを聞かれた。私は小学校でいい先生に出会ったもんだから、あんないい先生になりたいと思っていたんですけど、ほかの人も「先生」と言うもんだから、「考古学」を研究したいと言った。すると、先生が「そんな希望はだめだ。『世界一の考古学者になりたい』と言わなければ」と言われて、僕は言ってもいないのに、「世界一」と書かれてしまった（笑）。恥ずかしかった。

でも、挫折もあったんです。夏休みの自由研究というのがあって、考古学でやったんです。長岡市にある国指定史跡の藤橋遺跡についてですけど。その頃、長岡市立科学博物館に通っていて、その研究をやりました。市内の自由研究発表会の代表になったけれども、担任は、僕のじゃ足りないと思ったらしい。担任は理科の先生だから、僕の考古学が研究じゃないと思ったんです。そこで先生は、僕のライバルに、岩石からクロムが取れるとかの「顔料の研究」を全部手取り足取りでやっていて、僕はそれを横目で見ている。いよいよ長岡市の発表の場に行ったら僕は落選で、そいつが通ったんです。それで、ひねて、もうやめたと思った。で、一度考古学をやめたんです。

#### ◆それは中学の時ですよ？

そうです。のめり込んで、そういう事件があって、もう誰も評価してくれないと思って、やめたんです。

実は、僕の出身中学に南中学文化賞というのがあって、僕は考古学でその賞を取ったんです。その時に拾っていた土器や石器なんか捨てちゃったんです。カッカして!負け方が悔しくてね。

その後、高校では文学少年だった。卒業が近くなったころ、みんなが受験勉強している中で僕も行きたいと思って、親父に頼んだら行ってもいいと言ってくれた。それから家の田んぼは売られていくんですけどね（笑）。

そこで、何をやるかという時に考古学が残っていた。あらためて、やる気になった。そういう経緯ですね。だから、単純じゃないんです。

#### ◆影響を受けた先生は？

一人は中村孝三郎さんですね。中学の時、長岡市立科学博物館によく通いました。最初は入館料も払わなきゃならなかったんですが、そのうち中村孝三郎さんという人がいると知って、たずねて行くうちにタダで入れるようになって、それからは暇さえあれば行ってましたね。

高校では、廃部寸前の地歴部に入って、3年のときに新入生を勧誘する演説やって、数名しかいない女の子の一人が来てくれて、非常にハッスルしてね（笑）。考古学に鞭を入れる一つになったんです（笑）。文化祭の発表にも中村先生が来てくれて写真を撮ったのが残ってますね。その後、大学に行きましたが、私の根っこは中村孝三郎さんの長岡市立科学博物館ですね。

#### ◆大学では？

大学に行って、1年生の夏休みに中村さんに報告に行った。しばらくして、昼近くになると、悠久山という山をトコトコ登ってきた白髪の老人がいて、それが山内清男（考古学者）だったんです。名前は知っていたけれども、山内先生に初めて会った。本ノ木遺跡（新潟県中魚沼郡津南町）の発掘にこれから行くところだった。中村さんが、「お前すぐ鞆持ちで行け!」というから、発掘についていきました。その時に初めて、中村孝三郎先生のほかに先生と呼べる恩師に出会えたのです。

もちろん國學院大学にも先生がおられたけれども、「考古学だけは、しばらくしたら俺は負けないぞ」という不遜な思いを抱く輩でしたから。その中で、頭の上からないのが山内清男でした。

山内先生には大変お世話になりました。しかし、何一つというのは語弊があるが、具体的に考古学について教わってはいないんです。どちらかというと、腰元のように

すぐそばにおいて、ちょっとでも行かないと電話や葉書が来るんです。そこで、行って、「先生、何か御用でしょうか」と聞くと、だまーって聞こえない振りをするんです。つまり、「顔を見せないじゃないか」といいたいんですね。まあ、しょっちゅうそういうことがありましてね。

ただその頃、内心忸怩たる思いがあったのは、古い時代のことが好きだったので旧石器のことを知りたかったことでした。しかし、國學院には何も無いし、教えてくれる人もいないから、芹沢長介（考古学者）のところを訪ねたんです。明治大学のね。で、『駿台史学』に先生の論文があるから、それが欲しくてね。訪ねて、「芹沢先生の書いた論文が欲しい」というと、「もうあれは無い」と言われ、それからは全部手写しですよ。

芹沢先生が明治大学を出られた頃、僕は学生だったので、しょっちゅう電話して、来てもいいと言うと行ったんです。今でも、電話番号を覚えています。で、行けば新しい情報を聞いたり、お母さんの手作りのご飯をご馳走になったりしていました。僕は、大学は違うけれども、芹沢長介が行う発掘の小頭だったんです。

だから、最初の出会いは中村孝三郎で、その次は山内清男で、その次が芹沢長介なんです。

#### ◆山内清男と芹沢長介というと、旧石器を巡る論争の当事者ですね

そのうち、芹沢と山内は対立していくんです。僕は両方に行ってるから辛くてね…。で、山内清男も知ってるんです。芹沢のところに行ってるってね。それがとても辛くてね。コウモリみたいな思いをしてね。\*

お互いに反目し合っていたけれども、山内と芹沢、特に芹沢からすれば、山内先生を研究者としてダメだというわけではないんですよ。今日はその話はしないけれども、いろんな理由があって離れたから…。

#### ◆話は変わりますが、ご趣味は？

何でも集めること。子犬みたいに集めるのが好きですね。新潟県立歴史博物館で、友の会が毎年一回「マイ・コレクション・ワールド」といって、会員のコレクションを持ってきて展示するというのをやっていて、私はずっとそれに参加しています。墨壺、鏡もあります。そのほか、北アメリカ北西海岸インディアンのシルクスクリーンは、個人として持っているコレクションでは、たぶん僕が一番だと思います。

イギリスに行った時は土日に骨董市があるのでしょっちゅう出かけ、集めましたけど。一番、誇るべきものはストーンヘンジ関係ですね。たとえばストーンヘンジの絵葉書だったら、イギリスにいるマニアには勝てないけれど、外国にいる人では僕が一番でしょう。整備の状況がわかりますよ。つかえ棒があったりね。

あと本ですね。ストーンヘンジの載っている本は全部集めている。あと、ミュージアムグッズね。世界のあちこち行った時のミュージアムグッズを結構集めている。

ある人が嗅ぎつけて、展覧会やりたいからって、僕のところに借りに来るんですよ。



#### ◆最後に、今後の夢をお聞かせください

縄文を世界に発信したい。外に向かっては縄文の発信。そして代表的なものは世界遺産に持って行く。それから、内にある縄文文化をもっと自分で解釈したい。最近書いたものには言葉のことを書いていますが、縄文人が言葉を操っていたということを入れて縄文文化のモノを見てみたらぜんぜん違うんです。たとえば、家というものは、我々考古学者だったら、家の大きさとか、プランだとかを気にするけれども、「家」という言葉があるとすれば、家の「内」とか「外」とかそういうこともあるはず。縄文土器も、土器の形や模様があって、土器はどういうことを意味しているのかということを知りたいですね。

これからの考古学として、「考古学離れの考古学」を提唱している。形や文様の変遷だとか、分布だとかいうのではなくて、模様なら「物語があるんじゃないか」ということを考える。だから、北海道から関東まで同じ模様が使われるのは意味があって、名前が付いているということ。考古学的な分析はもうやめた。たとえば、地方論とか言語学だとかを見てみたい。そうすると縄文文化が解ける。縄文人も言葉を使っていたという前提にモノを見ればわかるんですよ。注口土器が形として、新しいフォルムとしてあるということだけではなく、「これはどう社会の中で意味を持つのか」とか、そういうことを考えないと注口土器が出てきたり、無くなったっていうのはあまり意味を持たないですよ。まあ、そんなところです。

※ここで小林先生は目頭を押さえ涙ぐみます。かつての情景が頭に思い浮かんだのでしょうか。なお、先生はその後、渡辺仁氏（東大）、佐藤達夫氏（東大）のお話をされましたが、紙数の都合上、割愛させて頂きました。